

かかわる力を育む幼小一貫の 道徳教育カリキュラム開発のための基礎研究 (2)

宮里 智恵 石原 直久 神山 貴弥 鈴木由美子
君岡 智央

1. 問題の所在と本研究の目的

本研究は、昨年度から取り組んでいる「かかわる力を育む幼小一貫の道徳教育カリキュラム開発のための基礎研究」である。

近年、青年期におけるいじめやひきこもりなどの反社会的行動や非社会的行動の増加が問題となっており、その原因として対人関係能力の未発達が指摘されている。対人関係能力は幼児期から児童期に人と直接にかかわる体験を積み重ねることによって培われる。昨年度の研究では、特に異年齢の子どもと継続的にかかわることで対人関係能力の育成は可能であることが宮里・井上・鈴木・石原・岡野は(2005)によって明らかとなった。

昨年度の研究では異年齢交流活動の効果について、質問紙法を用い、量的変容を捉えて検討したが、異年齢交流活動の進行に伴う子ども個人の質的変容を捉えることも同様に重要と考える。

そこで、今年度は参与観察法(エスノグラフィー)を用いることにより、子どもの変容を質的に捉え検討することを目的とする。(宮里)

2. 研究の方法

(1) 対象

広島大学附属三原学園 幼稚園年長児33名と小学4年生38名で構成する33組のペア

(2) 方法

平成18年5月～12月までのペア活動について4年生の担任(石原)が参与観察し、4年生児童の対人関係力の変容の様子を捉え記録する。

3. 本年度の主な交流内容(5月～12月)

○ 第1回交流会(時期:5月)

・単元名:「幼稚園さんと仲良くなろう」

・ねらい:ペアと一緒に遊ぶなどして、お互いのことを知り合い、これからの交流に対する意欲を高める。

○ 第2回交流会:(時期:6月)

・単元名:「ペアさんと一緒に楽しく踊ろう」

・ねらい:8年生(中学2年生)から年上の者としての役割を学びながら、年長児とかかわりを深め楽しく踊る。

○ 第3回交流会:(時期:7月)

・単元名:「シールラリーをしてペア以外の幼稚園さんとも仲良くなろう」

・ねらい:自分のペアだけではなく、他の年長児ともかかわり仲良くなる。

○ 第4,5回交流会:(時期:9月～10月)

・単元名:「幼稚園さんと一緒にお菓子を買って遠足に行こう」

・ねらい:年上の者としての責任を自覚するとともに、自分のペアや他の年長児とのかかわりを深め、信頼関係を築く。

○ 第6回交流会(時期:11月～12月)

・単元名:「一緒に楽しもうクリスマスケーキ作り&クリスマスパーティー」

・ねらい:年長児の思いを大切にしながら、年長児も自分も共に楽しめる活動を創り出すことが出来る。

4. 交流での子どもたちの様子

子どもたちは、年長児との交流を毎回楽しみにし、年長児と仲良く活動している姿が見られた。

しかし、すべての子どもが年長児とよりよい関係をすぐに築くことができたわけではなく、子どもの実態は次の3グループに大別される。

Aグループ:最初からペアとよりよい関係を築くことができた子ども。

Bグループ:最初はペアと意思疎通がうまく出来な

かったが、徐々によりよい関係を築くことができるようになった子ども。

Cグループ：会話が続かなかったり、ペアが注意を聞いてくれなかつたりする状況が、最初の交流から続いた子ども。

以下、Aグループのa児（女兒）と、Bグループのb児（女兒）、Cグループのc児（男児）の3人について参与観察したことをもとに述べる。

① 第1回交流会

当日4年生の子どもたちは、自分で作った自己紹介カードをペアに渡し、好きな食べ物や好きな遊びについて話をしたり、園庭で遊んだりした。最初はお互いに緊張しており、4年生も年長児も自分の思いを相手になかなか伝えられずにいた。ほとんどの年長児が、4年生からの「すべり台で遊ぶ？」などの問いかけに合わせて遊んでいた。しかし、活動が進むにつれて徐々にうち解け、お別れの時は年長児からも「また、一緒に遊ぼうね。」「お姉ちゃん、また来てね。」などの言葉が聞かれ、別れを惜しんでいた。交流後のふり返りでは、ほとんどの子どもたちが「ペアの幼稚園さんと仲良くなった。」と答えていた。

a児：学級でだれにでも優しく声をかけ、友だちの良い行いを帰りの会で発表するなど、周りの友だちのことを考えて行動できる子どもである。a児は交流会当日の朝から熱があり、体調が優れなかったが、「ペアさんを悲しませたくない。」という思いで登校してきていた。a児のペアは自分の思いをはっきりと表現でき、工作が好きな女の子である。交流会では、a児のペアは得意の折り紙遊びをa児に披露し、折り方を説明していた。体調が優れない中、a児は、ペアの話を相手の目を見て、時々うなずきながら聞き、一緒に折り紙を折っていた。ペアはa児が上手に折れると、「お姉ちゃんすごい！」と褒めていた。褒められたa児も喜んでいて。折り紙以外でも年長児のペアがa児に、「遊びを教える」という場面が多く見られた。a児はペアのやりたい遊びにずっと笑顔で付き合っていた。

b児：学級では特定の親しい数人の友だちといつも一緒に遊んでおり、それ以外の友だちに自分から話しかけることは少ない。気の合う仲間とはうち解けて、自分の思いを素直に出すことが出来るが、それ以外の他者には別人のように、自分の思いを伝えることが出来ない。それ故交流会前、「ペアの幼稚園さんと、うまくおしゃべりできるか心配。」と、不安な様子だった。また、b児のペアも、親しい友だちとはよく話すが、それ以外の友だちに、自分から話しかけることは少ない。

当日b児は、心配そうな様子でペアに話しかけていたが、ペアが、「うん。」と頷くぐらいで、どう話をつ

なげていけばいいか困っていた。自由遊びの時も、b児が提案した遊びで一緒に遊んでいるようであったが、途中ペアは友だちの姿を追っていくなど、「ただ一緒にいるだけ」だった。b児は学級内での様子と同様、「相手と話したい。」という思いはあるのだが、自分から相手に働きかけるのが苦手なため、ペアとの関係をつくりだすことが難しい様子だった。

c児：いつも明るく元気で、何事にも一生懸命とりくむ活発な男の子であるが、「何事も完璧にしなければならない。」「きれいに丁寧に仕上げなければならない。」という思いが強く、周りからの評価をととても気にしており、自分の考えを周りを気にしながら発表している。また、自分の思った通りにならない時はすぐにあきらめるところもある。本人はサッカーが好きで、「交流会の時は一緒にサッカーをしたい。」と楽しみにしていた。しかし、ペアは虫に詳しく、園生活の自由遊びの時間ではいつも虫を探している。当日も「ぼくがアメンボをつかまえるから、お兄ちゃんはアメンボをビニル袋に入れて持って」と、ずっと池のそばでアメンボ捕りに夢中になっていた。虫が苦手で、アメンボ捕りに乗り気ではないc児を気にもとめずペアは一人アメンボ捕りに熱中していた。時々c児は、「ねえ、ボール遊びしようよ。」と誘っていたが、ペアは「したくない。アメンボ捕りをする。」と言い、c児の要求を全然聞き入れなかった。そのうちc児が呼んでも来てくれなくなり、c児は困り果てていた。その後c児はほとんどペアと話をすることなく、交流会中ずっと不機嫌そうにしていた。

c児は自分が思い描いていたかわりが出来ず、とまどっていた。特に、自分は虫が苦手であるにもかかわらず、虫が大好きなペアとこれからどのようにかわっていけばいいのか悩んでいた。最初のうちはどうか状況を変えようとしていたが、年長児の行動が変わらないことから、途中で自分からかわることをやめてしまった。この時c児は、自分が思い描いていた「自分の言うことを聞いてくれる幼稚園さん」像と違い、全然自分言うことを聞いてくれないペアに対して強くはないが「嫌だなあ。」という気持ちを感じ始めていた。c児もペアも、お互いの気持ちに気づくことが出来ず、歩み寄れない状態であった。

第1回交流会のふりかえりプリントには、ほとんどの子どもが「とても楽しかった。」「楽しかった。」と答えており、これから始まる年長児との交流に意欲を高めていた。a児、b児、c児も「楽しかった。」と答えていた。しかし、b児とc児は、「幼稚園さんとうまくしゃべれなかった。」「幼稚園さんが言うことを聞いてくれなくてつらかった。」とも答えていた。

② 第2回交流会

第1回交流会後子どもたちは、第2回目の交流である運動会の演技「お兄さんお姉さんと一緒」の練習に取りかかった。

練習前子どもたちは、「幼稚園さんと一緒に踊るのが楽しみ。」「ペアさんとたくさん会えるから、もっと仲良くなれるぞ。」と、活動を楽しみにしていた。練習を重ねる毎に子どもたちは、「だんだん話ができるようになった。」「幼稚園さんが笑顔で踊ってくれるようになった。」と、ペアと「仲良くなってきている」という実感をもち始めた。しかし、「幼稚園さんが言うことを聞いてくれなくて困る。」「何度注意しても、直してくれない。」と、困っていることや、悩みも出されるようになってきた。

a児：年長児との練習を重ねる毎に、お互いの信頼関係をより深めていた。a児は、「私のペアさんは、私の言うことをよく聞いてくれる。私にとってうれしい。」と、ペアの自分に対する態度に喜んでいて。練習の時a児は、常にペアの目を見て話しかけたり、踊ったりしていた。またペアが話しかけたときは、途中話を遮ることなく、最後までうなずきながら話を聞いていた。このa児の態度がペアに安心感を与え、お互いの信頼関係を深めていったと考える。

b児：「ペアさんが話しかけてくれない。」と悩んでいたが、それでも練習の最初の頃はペアに何度か話しかけていた。しかしペアが話してくれないため、徐々に話しかけることが減り、そのうちペアを見つめることが減ってきた。「どうしたらいいのだろうか。」と悩んでいたが、練習後、学級に帰ってからの話合いなどを通して、友だちの意見を聞く中で、徐々に、「私のペアさんはおとなしいので、自分からあまりしゃべらない。私と似ているなあ。」と、ペアと自分との共通点に気づきやすなど、ペアの言動の裏に隠された思いを考えることが出来るようになっていた。

c児：第1回目の交流会での「なんだか、うまくいかないなあ。」「なんだか嫌だなあ。」という思いをずっと引きずって活動していた。練習後のふりかえりでc児はいつも、「ペアさんが言うことを聞いてくれない。」「わがままばかりして、困っている。」と、ペアとの関係に悩んでいた。

ある時、他の年長児が自分のペアの4年生の膝に座っている様子を見たc児のペアは、c児の膝に座ろうとした。しかし、c児は「やめて。」と言って、ペアをはねのけてしまった。c児のペアの様子をよく見てみると、c児の言うことを聞かない割りにはc児のそばを離れることはなかった。c児のペアは、c児の手を無理矢理引っ張ったり、c児の背中に飛びついたり

していたが、これは、c児に対する「甘えたい」という欲求からきているものであった。しかし、c児にとっては、これらの行動が、「僕を困らせる行動」としかとらえられず、ペアと目を合わせたり、話しかけたりすることはほとんどなく、ペアが話しかけているときもc児はペアを見るのが少なかった。c児はペアとのかわりを避けているようにさえ見え、行動に裏に隠されたペアの思いを感じとることが出来ないでいた。

この運動会での交流を通して、子どもたちは、「幼稚園さんは、私たちの言うとおりににはならない。」「幼稚園さんは、慣れてくると、わがままになることもある。」

「一緒に活動するだけで、自然と仲良くなるわけではない。」ことに気づいた。また、4年生や年長児が病気などで休んだとき、自分のペア以外の年長児と活動したことがきっかけとなって、「自分のペア以外の幼稚園さんとも仲良くなっていないといけない。」と、今後の活動について考えるようになった。

③ 第3回交流会

第3回交流会では、子どもたちは「シールラリー」を計画した。a児、b児、c児とも、年長児にあげるシールを貼る台紙を一生懸命に作っていた。関係が、「うまくいっていない」と感じているc児も、「ペアさんは青が好きだから青色のリボンをつけよう」と、ペアのことを考えながら活動していた。b児やc児にしても、「幼稚園さんと早く仲良くなりたい」という思いを、強くもっていることが感じられた。

④ 第4、5回交流会

ア 今までの交流をふりかえろう

これまでの交流を通して、「ペアさんが何を考えているのかよく分からない。」「本当に喜んでいてのだろうか。」と、年長児とのかかわりで悩んでいる子どもたちがいた。また、ペアが言うことを聞いてくれなくても、「注意して、嫌われたらどうしよう。」と、ただ我慢するだけで、自分の思いを伝えきれない子どもたちもいた。子どもたちは、「幼稚園さんと仲良くなりたい。」と強く思っていた。そこで、「仲良くなる」ということを、子どもたちがどうとらえているのか、全体で明確にするために、今までの交流をふりかえり、自分とペアとの関係について学級全体で話合いを行った。

子どもたちに、「あのペア同士は良い関係だなあ。仲が良いなあ。」と思うところを出させると、多くの子どもたちがa児のところをあげた。その理由は、

- ・「aさんもペアさんもいつも笑顔だ。」
- ・「お互いに目を見て話しをしている。」
- ・「冗談を言い合っている。」

などであった。子どもたちは、「仲良くなる」とは、「目が合うようになる。」「幼稚園さんから話しかけてく

る。「冗談など、いろいろな話が出るようになる。」
「会話が続く。」「幼稚園さんから手をつないでくれる。」ということで判断していることがわかった。また、一番うれしいことは、「お兄ちゃん（お姉ちゃん）」と呼んでもらったときと答えた。

しかし、b児などからペアとうまくいっていないことや、困っていることなどが出された。その悩みや困っていることについて、他の友だちから、「いけないことは、ちゃんといけないと注意した方が良いよ。」「幼稚園さんの目をみて話しかけたら、ちゃんと答えてくれるよ。」「幼稚園さんの後ろから話しかけるのではなく、横から優しく話しかけるといいよ。」「幼稚園さんがしゃべってくれなくても、とにかくこちらから話しかけることが大切だよ。」と様々なアドバイスが出された。

話し合いを通して、子どもたちは年長児と仲良くなるためには、年長児の表情や言動から年長児の思いを感じとり、自分たちから積極的に年長児にかかわっていくことが大切であることを考えることが出来た。b児は、「そうか、私はペアさんが話してくれないから、そのまま何も話しかけてなかった。今度みんなが言ってくれたアドバイスを試してみる。」「私と同じでペアさんもきっと恥ずかしいんだね。だったら、4年生の私が、がんばらなきゃ。」と、今後の交流に見通しをもてたようであった。

しかし、c児は、「何回注意しても聞いてくれないから、どんなことをしてもだめだろうなあ。」と、今後のかわりに不安を残したままであった。

イ 遠足でする遊びを考えよう

子どもたちは、幼稚園に行き、年長児に遠足に行くことを説明し、目的地の公園でどんなことをしたいか聞いた。今回は、「自分のペアだけではなく、他の年長児とも仲良くなる」というめあてを持ち、サッカーや野球、バドミントン、長縄など、多くの友だちと出来る遊びを提案していた。多くの子どもたちが、年長児の横に座り視線を年長児にあわせて話をしていった。年長児も笑顔で4年生と話しをしていた。年長児と目を合わせ、積極的に話しかける子どもたちの姿に、「幼稚園さんの思いを聞こう」という強い意識を感じた。

a児：いつものように笑顔で、ペアとどんな遊びをするか話合っていた。a児とペアはほとんど見つめ合って話しをしており、お互いの関係がさらに深まっているようであった。お互いの姓名をネームプレートに書くときも、「良く書けたね上手だよ。」とペアをほめていた。また、ペアがふざけてa児の髪の毛をついたり肩をたたいたりしても、「やったなあ。」とニコニコ笑いながらペアと追いかけてこするなどしてじゃれ

合っていた。a児は、ペアに対して「ペアさんと一緒にいると楽しいなあ。」という好意の感情をもっており、ペアの自分に対する様々な言動を、「私のことを好きなんだ。」と、喜びをもって受け止めていた。

b児：友だちからのアドバイスを受けて、今までにも増して積極的にペアに話しかけていた。ペアの方から話してくれなくても、何度も優しく話しかけていた。ペアがあまりしゃべってくれなくても、b児は何か手応えを感じているようであった。活動後には、「先生、なんだか良い雰囲気になってきた。」と言ってきた。その理由を聞くと、「まだ、あまり話してはくれないけど、私の目を見て話を聞いてくれるようになってきた。」と、ペアの言動の変化を見つけてうれしそうであった。b児は、自分が行動を見直したことでペアの行動が少しずつ変わってくることに喜びを感じていた。

c児：今まではペアの後ろや斜め後ろに座っていたが、友だちのアドバイスをうけて、ペアの横に座るようになった。また、今までよりもペアの方を見て話しかけるようになった。しかし、ネームプレートに年長児がc児の名前を書こうとしたとき、「僕が下書きをするから、その上を書いて。」と注意し、ペアがその線をはみ出しそうになると、「やっぱり僕が書くから。」と、結局自分で全部書いてしまった。普段からc児は、「何事も正確にきちんとしたい」「失敗したくない。」「うまく出来なかったところを人に見られたくない。」という思いを強く持っている。そのため、「言うことをちゃんと聞いてほしい。ふざけないでほしい。」という思いでペアに接しており、ペアの思いを感じとれていない。また、ペアに対して漠然とした苦手意識をもっているため、「まためちゃくちゃにするにちがいない。」「言うことを聞いてくれるはずはない。」と、悪い方にばかり考えているようであった。

ウ 遠足に行こう

遠足当日、子どもたちはペアと手をつなぎ目的地の公園まで歩いた。公園に着いてからは、ペアだけと遊ぶのではなく、近くにいる他の年長児を誘ったり、年長児同士の遊びをサポートしたりしながら、たくさんの年長児とかかわるようにしていた。

a児：ペアがやりたい遊びを一緒に行っていた。その中で、ペアと仲良しの年長児とも遊んだり、話しをしたりするなど、自分のペアと同じようにかかわっていた。いつも通り、年長児の目を見て話を聞き、年長児の話を最後までうなずきながら聞いていた。a児は、「他の幼稚園さんともたくさんお友だちになれた。」と喜んでいった。

b児：b児のペアはa児のペアと仲が良く、園でもいつも一緒に遊んでいる。b児のペアはこの日もa児の

ペアと一緒に遊んでいた。a児とペア、b児とペアの四人は一緒に鬼ごっこをしたり、すべり台で遊んだりしていた。b児は、いつもとは違い大声で友だちと遊んでいるペアの様子にびっくりしながらも、とても楽しそうであった。そのうち、b児からもペアからも相手に笑顔で話しかけるようになった。b児は、ペアを温かく見守るとともに自分から積極的にかかわっているa児の様子をみて、ペアとのかかわり方を考えたようであった。また、b児のペアは仲が良い友だちが一緒にいたことや、4年生に積極的に話しかけるa児のペアの様子を見たことをきっかけに、本来の自分を出すようになったのではないかと感じた。今までb児は交流の後、「今日もうまくいかなかった。」と、うつむいて教室に帰ってきていた。しかし、遠足から帰ってきたときはすばらしい笑顔で、すぐに教師の所に来て、「先生今日はとても楽しかった。幼稚園さんとたくさん話が出来た。幼稚園さんと仲良くなれてうれしい。早くまた交流したい。」と、うれしそうに話してくれた。

c児：c児のペアはこの日も虫探しに夢中になった。教師がc児のペアに「ペアのお兄ちゃんはどうしたの？一緒に遊ばないの？」と聞くと、「サッカーしているよ。」と草を掻き分けながら答えた。周りで友だちがペアと楽しそうに遊んでいても、気にならないようであった。

c児は第1回目の交流会と同じような状況になり、顔は曇っていた。c児は最初はペアのそばにいたが、そのうちサッカーボールを取り出し一人で蹴って遊びだしていた。「遠足に来る前、『公園でサッカーしようね。』と言ったら、ペアさんは『うん。』と言ったのに、全然言うことを聞いてくれない。」と、ペアが事前の約束と違った行動をとっていることに対して怒っていた。また、友だちたちがペアと楽しそうに遊んでいる姿を遠目に見ながら、うらやましそうでもあった。ペアはc児を避けようとしたり、c児とのかかわりに興味がなかったりするわけではなく、逆にc児をつついたり、だきついたりしてスキンシップを図ろうとする場面も見られた。しかし、c児にとっては、それらの行動が、「ぼくにいじわるをしてくる。」「嫌なことをする。」としかとらえきれていなかった。

エ 交流会をふり返ろう

交流会後、自己のふりかえりプリントや遠足当日に教師が撮ったVTRの視聴などをもとに、遠足のふりかえりを行った。

話し合いを通じて子どもたちは、年上としての責任を自覚することや、「幼稚園さんのことを考えて行動すると、必ず幼稚園さんもわたしたちのことをわかってくれる。」と、相手のことを考えて行動することの大切さ

を考えることが出来た。

a児：「今回はペアさんだけではなく、他の幼稚園さんとも一緒に遊んで仲良くなれました。」と発言するなど、ペアとの関係をさらに深め、他の年長児ともかかわりをもてたことを喜んでいて。

b児：普段は発表をあまりしないb児が、話し合いのとき手を挙げ、「みんなやaさんにアドバイスしてもらった通り、自分から笑顔でペアさんに何度も何度も話しかけてみました。そしたらペアさんも笑顔で話してくれるようになりました。ペアさんとぐっと近づいた感じです。」と発表した。b児は自分とペアとの問題点や悩みをみんなに伝え、友だちからのアドバイスを受け入れて、自分の言動を見直したことで、ペアと笑顔で会話ができたと喜んでいて。

c児：遠足の時ペアが言うことを聞いてくれなくて困ったにもかかわらず、ふりかえりプリントには「遠足は楽しかった。」「ペアさんも楽しかったと思う。」と答えていた。話し合いでも「自分はペアさんと仲良くなれた。」と答え、自分とペアとの問題点や自分の悩みを素直に表すことはまだ難しい様子であった。

⑤第6回交流会

ア 出し物の準備と練習

子どもたちは、第6回交流会は、ペア同士でクリスマスケーキを作り、クリスマスパーティーを行うことを計画した。

今回の交流は班での活動が主となる。子どもたちは、各班毎にクリスマスパーティーで行う、ビンゴや手品、紙芝居、劇の練習を始めた。

a児：a児の班はオリジナルの物語を紙芝居にして、発表することにした。この頃a児は、「最近ペアさんと、あまり話しをしなくなった。」と、ペアとの関係の変化を感じ始めていたが、特に悩んでいる様子ではなかった。確かにa児とペアが活動している時の様子を見ると、以前はお互いに寄り添い、笑いながら話をしたり遊んだりしていたが、今は少し離れて活動することが多くなり、あまり話しをしなくなっていた。だが、仲が悪くなったわけではなく、活動中はお互いに相手の様子を確認したり、一言二言言葉をかけたりしていた。この段階では、a児とペアとの関係は強固なものになっており、あえて視線を合わせたり、話したりしなくてもお互いに分かりあえていた。

b児：b児とc児は同じ班に所属しており、この班は「西遊記」の本をもとに紙芝居を作り発表することにした。b児は第5回目の交流会後、活動中常に一緒にいて、よく話をしていた。また、お互いに冗談を言い合えるようにもなっていた。ふりかえりでも、「今日も楽しく活動できた。」と自分の思いを発表し、「〇〇ちゃ

んは、とても楽しい子なのよ。」と、自分のペアの良さを友だちに自慢するようになっていた。

c児：相変わらずペアと視線を合わせたり、話をしたりせず、あまりペアとかかわることがなかった。いつものようにペアが甘えてc児にだきついてきたり手を引っ張ったりしても、怒ることもせず無視することが多くなってきた。以前は近くに教師が来るとその視線を察知して、「○○君、こっちにおいで。」と、急にペアとかかわっていたが、この頃は近くに教師が来てもペアとかかわろうとしなくなっていた。紙芝居を作成しているとき、c児のペアは絵に色を塗りがついていたが、c児は「だめ。」と言ってペアに何もさせなかった。ペアがあまりにも退屈そうにしていたので、教師が「ペアさんも色を塗りたいのじゃないかな。ペアさんにも塗らせてあげたら。」と言うと、c児はペアが持っていた油性ペンの代わりに鉛筆を渡して、ほんの一部分をペアに塗らせた。ペアはおもしろくなさそうにしていたので、なぜもっと塗らせないのか理由を聞くと、c児は「だって、めちゃくちゃに塗って汚くするから嫌だ。」と答えた。c児は、あくまでも「何事もきれいに、完璧に仕上げなければいけない。」ということを優先し、ペアの思いを感じることが出来ていなかった。

イ クリスマスケーキ作り&クリスマスパーティー

交流会当日、a児やb児はペアに、「何をやってみたい。」「どんな風に飾り付けしたい。」と聞きながら、ペアの思いを受け止め、自分の思いもペアに伝えながら、ケーキの飾り付けを行っていた。しかしc児は、ペアの思いを聞くこともせず、自分だけでケーキの飾り付けを行っていた。ペアは、何かやりたそうであったが、c児に思いを伝えることもできず、ただそばでc児の様子を見ているだけであった。教師がc児に、「ペアさんも、何かしたいんじゃないのかな。」と言うと、「○○君、何がしたいの。」と、ペアがケーキをどのように飾り付けたいのか聞くには聞いたが、飾り付けは自分が行い、ペアに飾り付けをさせることはなかった。

しかし、作ったケーキを食べるとき、c児は切ったケーキが倒れないように気を配りながらペアのお皿に載せてあげ、また、余ったケーキをペアにあげていた。

他の班の出し物を見ているとき、c児はペアが勝手に他の場所へ行ってしまうように、ペアの手首をつかんでいた。しかし、そのうちペアがc児の手のひらを握ってきた。c児は何も言わずにペアの手を握りしめながら座っていた。

ウ 交流会をふりかえろう

交流会のふりかえりアンケートには、a、b、c児すべて、「楽しかった。」と答えていた。

話し合いにおいてc児は、「ぼくも楽しかったしペアさんも楽しんでた。」と答えた。ペアがケーキの飾り付けをしていなかった訳を尋ねると、「ペアさんに聞いても、最初は何も答えてくれなかったし、後でも『何もしたくない。』と答えたから全部ぼくがした。」とc児は答えた。「ぼくは精一杯やった。」とも答えた。しかし、交流会当日の様子を撮ったビデオをみんなで見た後、ある子どもが、「ビデオを見て気づいたんだけど、cさんのペアさんは、何かしたかったのではないかな。cさんは、『精一杯やった。』と言ったけど、もっとやらなければならないことがあったのではないかな。」と発言した。c児は話し合いで初めて自分の行動を指摘された。c児はしばらくだまっていたが、目に涙をためながら、「いつも僕の言うことを全然聞いてくれないから、ペアさんには何もさせなかった。」「ケーキをぐちゃぐちゃにされたら嫌だからペアさんには何もさせなかった。」と、自分の本心を語った。他の班の子どもから、「それはおかしい。」という意見が出される中、c児と同じ班の子どもが、「cさんのペアさんはとても元気が良くて、言うことを聞いてくれないことが本当に多いんです。cさんは困っていたし、たいへんだったんです。」と、c児を擁護する発言が出された。c児は、「第1回目の交流の時から悩んでいた。ペアさんと仲良くなりたいんだけど、ペアさんは僕に嫌なことばかりしてくる。どうしていいかわからない。とても困っている。」と、ペアとの関係で悩んでいることを初めて語りだした。子どもたちからは、自分の経験をもとに、「cさん、ペアさんはcさんのことが本当は好きなんだよ。甘えているんだよ。」「そうそう。僕のペアさんもそうだったけど、小さい子って、わざと嫌がるようなことをしてかまってもらいたいんだよ。」という意見が出された。またビデオや写真でc児のペアが、c児の手を握っている様子を見て、「ほら、ペアさんから手を握ってきているじゃないか。ペアさんはほんとにcさんが好きなんだよ。」という意見により、c児は笑顔になり、「確かに、ペアさんは僕に甘えているんだと思います。」と、答えた。c児の顔は初めて晴れ晴れしていた。

冬休み前、子どもたちはペアにクリスマスカードを作り、渡しに行った。その時のc児の様子は今までとは違い、笑顔でペアに話しかけていた。また、今まではc児は、ペアの体に触れることがほとんどなかったのに、ずっとc児はペアの肩に手を置いていた。

5. 考察

① a児が最初からペアとよりよい関係を築くことができたのはなぜか

a児は、自分の思いよりも、ペアの思いを大切に
して、ペアのやりたい遊びを優先した。また、ペアの話
を途中で遮ることなく、うなずきながら聴いていた。
時には年上の者に対する言い方としてはおかしい表現
があっても責めることなく、最後まで聴いていた。こ
のa児の「すべて受容する」という言動が、ペアを安
心させ、最初からペアとよりよい関係を築くことがで
きた要因であると考えられる。ペアはa児に対して、「信頼
できるお姉ちゃん」という感情を抱き、安心してa児
に心を開くとともに、最初から「普段の自分」を出す
ことが出来たと思われる。

② b児が交流の途中からペアとよりよい関係を築く
ことができるようになったのはなぜか

b児はペアとの関係で悩んでいること、困っている
ことを素直に友だちに打ち明け、友だちからのアドバ
イスを受け止め、自分の言動を見直したことで、ペア
と、よりよい関係を築くことができた。ペアの目を見
て話す、ペアの話を最後まで目を見ながら聴く、自分
から積極的に話しかけるなど、今まで気づけなかつた
り、恥ずかしくできていなかったコミュニケーション
スキルを学んだことが、大きな要因であると考えられる。

③ c児のペアに対する見方が変わったのはなぜか

c児は、最初のペアとの出会いでのすれ違いにより、
ペアに対して「なんだか嫌だなあ。」という気持ちを抱
いてしまった。そのため、ペアがどのような行動をとっ
ても「嫌だ」という気持ちが先行し、怒りの感情まで
もつようになっていた。この「嫌だ」というペアに対
する感情は、「なんでもきちんとやりたい」というc児
のこだわりと相まって、さらに、ペアとの心理的距離
を拡げてしまった。

ペアに対するこの強固な感情が、12月終わりになっ
て変容できたのは、

○ ペアとしてこれから何年間もかかわっていかね
ばならないので、何とかしてよりよい関係を築き
たいという思いがc児の気持ちの中にはあったこ
と。

○ c児を「僕のお兄ちゃん」と、慕う気持ちがペア
に強かったこと。

○ 一緒に苦労しながら、よりよい関係を創り出して
いこうという友だちの支えがあったこと。

このような要因が、c児が変容するきっかけになっ
たと考えられる。

④ 「幼稚園さんとの交流」による子どもたちの成長
4年生の子どもたちに、「4月と比べて、力がついた
ことや成長したことは何ですか。」と質問紙により聞いた
ところ（平成18年12月19日。36名。複数回答）、
・「自分の思いや、意見を発表できるようになった。」

(16人)

・「友だちなどに意見を言ったり、注意したりするこ
とが出来ようになった。」(15人)

・「トイレのスリッパをそろえるなど、自分たちの学校
環境をよりよくしようと思うようになった。」(15
人)

・「係や当番など自分の仕事を進んでやるようになっ
た。」(9人)

・「幼稚園さんのことを考えて行動することが出来るよ
うになった。」(9人)

・「困っている友だちに気づいて助けたり、友だちの良
いところに気づくことができるようになったりし
た。」(12人)

・「やさしくなった。」(6人)

・「全体やまわりのことを考えて行動することが出来る
ようになった。」(7人)

などの回答があった。子どもたちは以前と比べて、自
分の思いや意見を相手に伝えることが出来るようにな
ってきた。また、学校のきまりを尊重し、自分たち
で学校をよりよいものにしていこうという意欲も高
まってきている。子どもたちが、このように成長して
きたのは、年長児との交流が大きな要因である。それ
は、「なぜ力がついたのか、なぜ成長したのか。」と理
由を聞いたところ、20名の子どもたちが、「幼稚園さん
と交流をしたから。」と答えたことからわかる。

子どもたちは4、5月当初、年長児が言うことを聞
かなかつたり、自分勝手な行動をしたりしたとき、「注
意したら、嫌われるのではないか。」という思いが強く、
年長児に注意することをためらっていた。しかし、交
流を続けていく毎にペアとのかかわりを深め、「やっぱ
り、いけないことはちゃんと注意しなければならない。」「注
意しても、嫌われることはないし、嫌われても注意しな
ければならない。」という思いが変わって
いった。実際にペアに注意しても嫌われたり避けられ
たりせず、より深く信頼関係を築くことができたこと
で、年長者である自分がただ我慢するのではなく、ペ
アの気持ちをくみながらも「嫌なことは嫌」と、自分
の思いや意見を相手に伝えることの大切さを学んだも
のと考えられる。

交流の過程で、子どもたちは多くの方々の支えによ
って自分たちは楽しく活動できていることを知った。
遠足に行く活動の前に年長児とスーパーマーケット
にお菓子を買いに行ったとき、スーパーマーケットの
従業員の方々は何度も計算し直してくださり自分た
ちが持って行った金額内におさまるようにしてくだ
さった。遠足に行った公園では、掃除をしてくださ
っている方々の様子を実際に見ることが出来た。また、

クリスマスケーキ作りでは、製菓工場に行き、自分たちが年長児と一緒に食べるケーキを丁寧に作られている職人さんの様子を見学した。これらの活動を通して、子どもたちは、自分たちの交流活動が多くの方々のおかげにより成り立っていることを知り、感謝の気持ちを強く持つことが出来た。そのことから、「自分たちも、みんなのためにがんばろう」という思いを持ち、トイレのスリッパをそろえたり、汚れている所をふいたりすることが出来るようになった。

年長児との交流は、ただ単に「思いやり」の心情を育むだけではなく、まわりの人達や先輩たちへの感謝の思い、公共心など、様々な面で子どもたちを成長させていると考える。

⑤ 年長児との交流の特徴

子どもたちに、『幼稚園さんとの交流』と他の学習や行事との違いは何ですか。」と聞いたところ（平成18年12月20日。36人。複数回答。）、

・「自分たちで計画し、自分たちで実行し、自分たちでふりかえりをするなど、自分たちで進めていくところ。」

・「すべて自分たちでやる場所。」

・「幼稚園さんのことを考えながら自分たちで活動を進めていくところ。」

など、「自分たちで、活動を創り上げていくところ」と答えた子どもが19人いた。また、

・「年上として、年下の幼稚園さんのことを考えながら責任をもって行動しなければならないところ。」

・「年上として、自分がリードしなければならないところ。」

など、「年上の者としての責任と、リーダーシップ」と答えた子どもが10人いた。これらのことから、子どもたちにとって年長児との交流は、

○ 主体的な活動

○ 責任がありリーダーシップをとって行動しなければならない活動

○ 楽しい活動

という特徴をもつことが分かる。

子どもたちが、自分から年長児に働きかけ、相手の様子から自分の言動を見直し、よりよい関係を築くために自分を変革していくことが出来たのは、年長児との交流がこのような特徴を持つ活動であることに起因していると考えられる。

⑥ 子どもたちの自己変革への手立て

しかし、ただ交流するだけで、子どもたちは自分の言動を見つめ直し自己変革していったわけではない。子どもたちに自分たちの言動をふりかえらせるために、教師側は次の3つの手立てを考え実行した。

ア 交流会前後にアンケートをとる

○各交流会の前後、または単元の途中でもアンケートをとり、子どもたちの思いを把握し、指導に生かすと共に、子どもたち自身にも自分の思いをふりかえらせ、自分の行動を見つめ直させていくようにした。

イ 交流会前後に必ず話合いの会をもつ

○各交流会の前後、または単元の途中でも、適宜学級としての話合いの会をもち、自分と友だちの思いを交流し、悩みや喜びを共有するとともに、お互いにアドバイスをし合うことで、学級全体として、年長児に関わっていくようにした。

ウ 活動の様子をビデオや写真に撮り、事後子どもたちに見せる

○単元の途中や交流会後、年長児と自分たちが一緒に活動している様子を撮ったビデオや写真を見て、自分や友だちの様子から、自分たちの言動をふりかえらせた。

この中で、子どもたちが「自分をふりかえり、言動を見つめ直すのに有効だった。」と答えたのは、イとウであった。特にウについては35名の子どもたちが、「よかった。」と答えた。これは、年長児の表情や言動がよくわかること。また、年長児の表情や言動から自分の言動との関連を把握できることなどが理由である。また、ビデオや写真をもとに話し合うことで、友だちの言動を参考に出来たり、友だちからアドバイスを受けたり、指摘を受けることで、お互いに学び合うことが出来たものと考えられる。

アについては、「書くときに、その時の思いや様子を思い出せない。」「自分の思いを言葉で表すのは難しい。」という理由で、子どもたちは、「自分をふりかえるのに、あまり参考にならなかった。」と答えた。子どもたちは、活動中は夢中で年長児とかかわっていることや、言葉になりにくいさまざまな感情を体験しているということだろう。

(石原)

6. まとめと今後に向けて

本年度、異年齢交流活動を参考観察したことにより、次の2点が明らかになった。

①はじめから、相手とうまくかかわることができる子どもから、仲間に支えられながら、一年間かけて、ようやくかかわりの糸口を見つめることができる子どもまで、子どものかかわりの深さは一様ではないこと。

②異年齢交流をつみ重ねる中で、相手とのかかわり方を変容させていくプロセスも一様ではないこと。

これらの知見は、子どもの対人関係能力の変容を質

的に捉えようとしたことによって明らかになったものである。本年度の研究でもう1点明らかになったことは、教師の役割についてである。本年度、教師はこれまでのような仲介役ではなく、4年生の子どもが自分たちで活動をふり返り、課題と解決の糸口を見つけられるような支援をした。その中で、「交流会前後に必ず4年生どうしによる話合いの会をもつ」「活動の様子をビデオや写真によって振り返らせる」ことが子どもたちの自己変革を促す有効な手だてであることが示された。教師が子どもの同年齢交流を支える役割をすることで、子どもは、自分たちの対人関係能力を引き上げる機会を得ることになった。

今後は、同年齢交流と異年齢交流とのサイクルに着目し、それぞれの交流の中でどのような気持ちや力が育まれているのかを明らかにする必要がある。また、年下の子どもの対人関係力の変容についても、明らかにする必要がある。

(宮里)

【参考文献】

- 吉森護編著『人間関係の心理学ハンドブック』東京：北大路書房，1991
- 星野命編著『対人関係の心理学』東京：日本評論社，1998
- 奥田秀宇『人をひきつける心』東京：サイエンス社，1997
- 大坊郁夫『しぐさのコミュニケーション』東京：サイエンス社，1998
- 高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一編著『人間科学研究法ハンドブック』京都：ナカニシヤ，1998
- 箕浦康子編著『フィールドワークの技法と実際』京都：ミネルヴァ書房，1999
- 深田博己『インターパーソナル・コミュニケーション』東京：北大路書房，1998